



**私たちの歴史
SHOIN点描**



歴史的景観を意識したキャンパスリニューアルが始まる

雨の日も風の日も、学生・生徒の登下校をいつも見守ってくださっている守衛さん。時代や人が変わっても、生徒たちを見守る温かい目は変わることはありません。

平成元(1989)年、学園の創立から70年以上もの間、守衛さんと共に学生・生徒の登下校を見守り続けてきた正門守衛室の建て替え工事が行われました。建て替えにあたっては、あえて現代的な建材やデザインを採用せず、木造で建てられ屋根には瓦が載せられるなど、創立当時のレトロなデザインが忠実に復元されています。

その後、平成8(1996)年には長瀬川にかかる「橋橋」と「正門」のリニューアル工事を実行。昭和30年代に一旦は近代的なデザインへと変更されていた正門を、再び創立当時の面影が残るデザインへと戻す工事が行われました。これらの工事を経て、長瀬川側から正門、守衛室、記念館を臨む風景は、創立から間もない昭和初期の学園の雰囲気を思い起こす風景へと改修され、キャンパス内の施設・設備の近代化を推し進める一方で、学園の歴史的な景観を大切に守っていく方向性が示されました。

1989 生徒たちを見守り続けた守衛室の建て替え

くすのき

樟蔭学園報 Vol.162
大阪樟蔭女子大学/学院・大阪樟蔭女子大学短期大学部・樟蔭高等学校・樟蔭中学校・大阪樟蔭女子大学附属幼稚園



全面的にリニューアルされた中学校・高等学校の図書館



2010 新年のごあいさつ	1
NEWS ● 学生がデザインしたアンテナショップがオープン	10
レポート ● [学力作りと家庭づくり] 小河勝	3
SHOIN LABO ● [女性の感性が活きるインテリアデザイン] 豊嶋幸生	5
こもれびの窓 ● 老舗和菓子舗『亀屋良長』吉村恵美子	7
CLUB NAVI ● 高等学校軽音楽部	9
はぐくむ心 ● 中学校教諭角谷晴世	9
INFORMATION ● 参加イベントのお知らせ	14
we are Now ● 各校行事など	15
SHOIN点描 ● 生徒たちを見守り続けた守衛室の建て替え	19

豊嶋幸生

【てしまゆきお】

大阪樟蔭女子大学 学芸学部 インテリアデザイン学科 教授・学科長
京都工芸織維大学工芸学部意匠工芸学科卒業。
1965~98年株式会社大丸において、主に店舗やオフィスのインテリアの設計・施工に携わり、国内のみならずアジア各国において活躍する。
成安造形短期大学造形芸術科、成安造形大学造形学部非常勤講師を経て、2003年~現在大阪樟蔭女子大学教授。
日本デザイン学会、意匠学会、関西インテリアプランナー協会、奈良県建築士会に所属。



インテリアデザインは、女性の感性がのびのびと息づく世界

インテリアデザインを突きつめると、快適な空間、使いやすい家具、安全で寛げる場所の創造に行き着きます。「人・もの・空間のあり方を考える」をテーマにかかげるインテリアデザイン学科は、まさに人の暮らしを豊かにすることを学ぶところです。豊嶋幸生教授は、民間企業において数多くのインテリアの設計施工に携わってきた経験をもとに、とことん考え、しっかりと手を動かして新しいデザインを創造する喜びを、学生に伝えています。

やはり日本人は床や畳で寛ぎたい?

明治維新や終戦後など世の中が大きく変わったたびに、日本人の暮らしも変化し、住居をはじめ室内空間も変遷を続けてきました。暮らし方が変わればインテリアも変わります。また一方で、新しいインテリアデザインが、現代人の暮らしの変化を先取り、快適な生活を創造する力になっています。

近頃面白いなと思うのは、現在は椅子での生活が定着しているように思えるのに、若い人々は暮らしの中に、床に直接座ったり寝転んだりすることを取り入れる傾向があることです。欧米はローマ以来ずっと椅子座様式ですが、日本は長く床座様式、つまり畳の生活でした。戦後急速に椅子座様式に変わりましたが、やはり日本人は椅子だけの暮らしより、畳やカーペットを敷いた床の上で寛ぐ時間が必要なようです。

室内設計プランを作る演習での学生が考えるプランの多くに、斬新でユニークな床で寛ぐスペースが設けられていることからも、若者の「床や畳で寛ぎたい」という傾向がうかがえます。

学生たちは実に魅力的な作品を作ります!

私が担当する2回生の『インテリア演習』では、2分の1サイズの椅子を自らの手で作ります。テーマは、「自分がいちばん座りやすい椅子を作る」こと。まず自分の身体

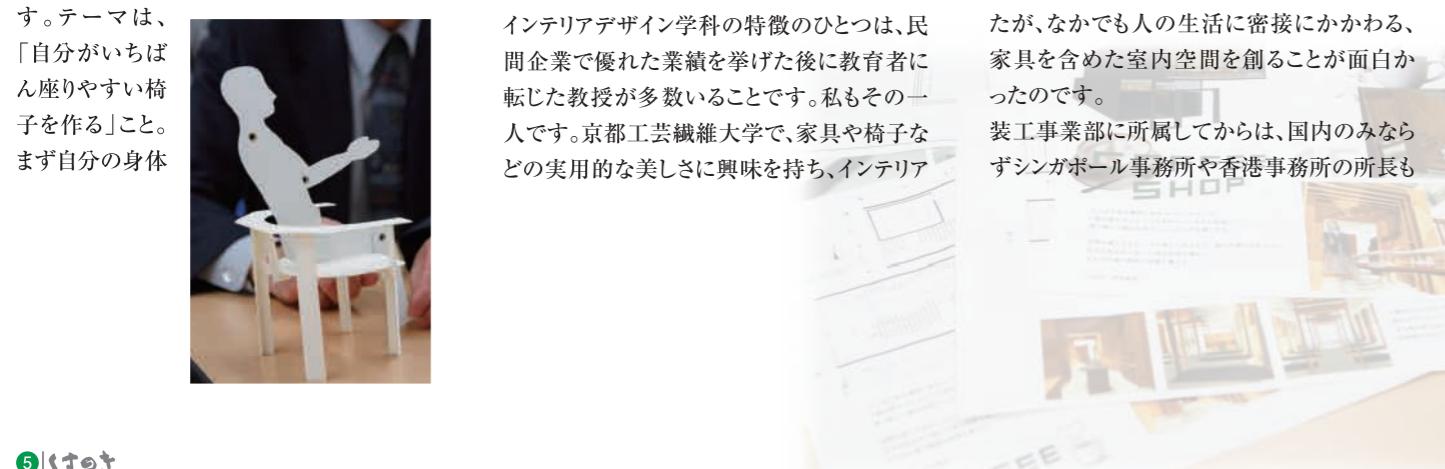
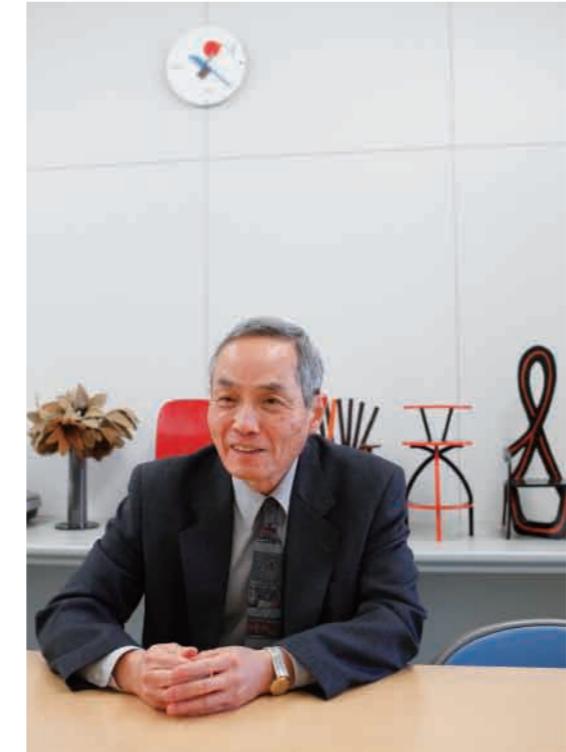


サイズを計測し、手足が曲がる5分の1サイズの人体型紙を作ります。それを使って、座るのに最適な座面の高さや肘掛の位置などを決めて、図面を描きます。その図面をもとにスチレンボード製の5分の1サイズの椅子模型を作ります。大切なのは小さいながらも立体的な椅子を作り、デザイン、バランスなどを確認すること。建築家が建物の模型を作り、プレゼンテーションをするように、平面では気がつかなかった座り心地、使いやすさが立体模型ならよく理解できます。そして背もたれの角度や足の位置など、調整すべき点は直して、次に2分の1の図面を描きます。最後は実習室で電動ノコギリなどの工具を使って、木製の椅子を完成させます。

電動ノコギリを手にるのは初めての学生がほとんどですが、デザインから図面描き、組み立てまで自分でするのが楽しいらしく、全員が力作を作り上げます。なかなか魅力的な作品揃いで、生活に密着した家具のデザインは、女性に向いている分野だな、といつも実感させられます。

いちばん大切なことは使いやすさと本物志向

インテリアデザイン学科の特徴のひとつは、民間企業で優れた業績を挙げた後に教育者に転じた教授が多数いることです。私もその一人です。京都工芸織維大学で、家具や椅子などの実用的な美しさに興味を持ち、インテリア



務め、海外での仕事もたくさん経験しました。世界中どこでも、人の暮らしはそれぞれに異なり、室内空間の好みも様々です。

6年間赴任していたシンガポールは中国系の人が75%、そのほかにマレー系、インド系の人などが住む多民族国家で、公文書には英語のほかに中国語(北京語)、マレー語、インドのタミル語も並べて書かれています。

シンガポールで、印象に残っているのは、中国系の人たちは、建物はモダンなのに、家具に関しては中国伝統の彫刻を施したものを好むこと。また、カーペットを敷くことも嫌いました。そのほか、香港はもちろん、スリランカのヒルトンホテルやガムにあるホテルのインテリアを手掛けたり、マレーシア王室の別荘の内装や家具の設計施工も担当しました。アジア各国での仕事を通して、それぞれの国の文化や民族性を感じられることができ、面白い経験をたくさんしました。

民間企業出身だからかどうかはわかりませんが、私が家具やインテリアデザインに第一に求めるものは、使いやすさです。使いやすさや快適さが乏しいインテリアは、いくらデザインが優れていても、人を幸せにしてはくれません。

研究テーマのひとつであるユニバーサルデザインも、求められるのは使いやすさです。ユニバーサルデザインは、かつては障がいがある方の安全を考慮したバリアフリーという意味が強かったのですが、今はすべての人が使いやすいデザインを指す言葉になりました。安全で使いやすく快適。そして、本物志向であること。これが私の求めるデザインです。学生にも奇をてらったものより、本物を追求することの大切さを伝えられればと思っています。

現場での経験は社会での自信につながる

今年度の豊嶋ゼミ3回生が取り組んでいるのは、本学のいろいろな学科と東大阪市及び石



豊嶋先生の研究室には、学生たちの個性豊かな作品が飾られています。

切参道商店街が協力して進めている商店街の活性化プロジェクトです。

近鉄石切駅から商店街に入るまでのアプローチとなる道路には、鉄道高架にそった区間があるのですが、この高架壁面がコンクリートむき出しで、なんとも殺風景なのです。これを環境デザインの視点で何とかできないかという要望があり、ゼミ生たちは、まず商店街を含めた地域の人たちにアンケートを実施し、そのニーズを探りました。

意見を集約すると、明るく楽しく、石切らしいレトロなイメージも表現したいということでした。それをもとに班に分かれてデザインを考えました。

そのひとつは、並んでいる灯籠の間にパネル状のものをつけ、そこに薦をからませてグリーンスクリーンを作るという案。上部の壁面には、春夏秋冬をイメージする桜、ひまわり、イチョウ、椿の絵を描きます。

そのほか、干支の十二支の絵プラス、すねている猫の13種の動物の絵をぎやかに描く案や、イロハニホヘトの文字をデザイン化して描くレトロっぽい案も出ています。

学生がデザインした壁画案



イロハニホヘトの文字をデザイン化したもの



十二支とすねている猫を描いたデザイン



吉村恵美子

よしむら・えみこ

東大阪市出身
1938年3月樟蔭高等女学校卒業

二人姉妹の妹が早くに亡くなつたため、ことさら大切に育てられる。
家に近く、先進的な女子教育に定評があった樟蔭高等女学校に何の迷いもなく入学。
女子教育に情熱を注いだ伊賀校長をはじめ、当時の先生方に優しく、厳しく育てられ、「樟蔭で人の基礎を作つてもらつた」と言う。
お嫁入り前に熟中したのがアイススケート。
千日前の旧歌舞伎座と朝日ビルにあったスケートリンクによく滑りに行った。
1936年にドイツで行われた冬季オリンピックに12歳(小学校6年生)で出場した「えっちゃん」とこと稻田悦子さんともお友達だった。
老舗「亀屋良長」に嫁いで女将として長年活躍。現在は、引退した大女将として悠々自適。
能と舞は、観世流能楽の伝承者である
杉浦元三郎先生に師事し、笛を森田順人先生・保美先生父子に、小鼓を林光寿(1月に吉兵衛を襲名)先生に、長期にわたって教わり、演奏を楽しんでいる。

江戸期から続く京都の老舗和菓子屋に嫁ぎ 戦前から現在まで暖簾を守り続けた日々

小阪キャンパス近くの瓜生堂の地主の家に生まれ、当然のように樟蔭高等女学校で学ぶ。21歳で嫁いだ先は、京都の老舗和菓子舗「亀屋良長」。古い暖簾を誇る名店の女将として、戦争を挟んだ激動の時代から平成まで店を守り、発展させてきました。今は隠居の身、70年前の女学校時代を回想しながら、旧き良き樟蔭の日々を語ってくれました。



戦前の充実した黄金期に 樟蔭高等女学校に入学

吉村(旧姓中田)恵美子さんが、京都の老舗和菓子屋「亀屋良長」に嫁いだのは21歳の時、以来70年近く伝統の暖簾を守り続けています。数年前に軽い脳こうそくを患い、現場こそ引退しましたが、88歳になった今でもお話しぶりは明るくて、元気そのもの。周囲からは、大女将さんと呼ばれ、愛されています。「亀屋良長」の創業は享和3(1803)年、今年で創業207年の老舗です。同店の代名詞ともいえる伝承の餡玉菓子「烏羽玉」を食べたことのある人は多いと思います。そのほかにも「京干菓子」、やわらかい種煎餅の「京都」、お正月には欠かせない「花びら餅」、そして季

節感に彩られた数々の上生菓子など、四条通醒ヶ井角にある本店のショーケースには、つい目移りするぐらいおいしそうなお菓子が並んでいます。

「一般のお客さんのほかに、お寺さんやお茶家さんとも、長くお付き合いさせていただいています」と言うように、店内には寺御用達の落雁や祝い事のお菓子も置かれています。吉村さんが生まれ育ったのは東大阪市の瓜生堂、小阪キャンパスの近くです。ご実家は当時広い田畠を持つ地主でした。

「樟蔭に進学するのは、生まれたときから決まっていたようなもの。両親も私も何の疑問もなく、隣町の樟蔭高等女学校に通うことになりました」

昭和8(1933)年入学の第16期生。大正7

(1918)年の創立から10数年を経て、教育内容の充実はもちろんのこと、開校時に植樹した木々が見事に育ち、学園は戦前の黄金期を迎えていた時期でした。遠く満州(現中国東北部)では事変が起つてはいたものの、女学生たちは、平和で明るく、のびのびとした日々を送っていました。

「制服は数年前に袴から今と同じセーラー服に切り替わっていて、なんともモダンなデザインで毎朝制服を着るのが楽しみでした」

伊賀駒吉郎校長や森平藏理事長の姿も、学内でよく見かけたそうです。

「当時は、校長さんや理事長さんは、とても偉い人という感覚で、尊敬の念を通り越し、親しく話すなどということはありませんでした。ただ、これからの女性は高い知性と思いやりが大切である、というようなお二人の訓話は、いまでも心のどこかに残っています」

吉村さんの得意科目は国語全般そして体育。「源氏物語や和歌、俳句、漢文が大好きでした。もっとも、数学はまるでできませんでしたけれど(笑)。当時は斬新だった体操着とブルマードでの体育も楽しかった。運動は何でも得意で、バレーボールクラブではキャプテンでした。ただ、時代のせいか学校の方針だったのか、今と違って対外試合の記憶はありません。たぶん学内でいくつかチームを作つて楽しんでいたのだと思います」

長い間習っていた小鼓と笛の演奏を楽しむ吉村さん。

卒業生の方々のご活躍の様子をお知らせください。

さまざまな分野でご活躍されている卒業生の情報をお寄せいただき、みなさまのお力を借りて、この「こもれびの窓」で幅広い卒業生の姿をお伝えしていきたいと思います。身近でご活躍の卒業生の様子をぜひとも樟蔭学園企画広報室までお知らせくださいますよう、お願いいたします。●TEL 06-6723-8152 ●FAX 06-6723-8263



店先に湧き出る名水「醒ヶ井水」で作った、季節感あふれる色とりどりの上生菓子や京干菓子



それでも休日に制服を脱いで、友達と宝塚少女歌劇などを見に行き、デパートで買い物を楽しんだりしました。

樟蔭で過ごした日々が 老舗を守る構えを育てくれた

そして21歳で、縁あって亀屋良長の当主に嫁ぐことになり、結婚式は京都市内の都ホテルで行われ、それは盛大だったそうです。

「義父は隠居していて、義母となるべき人も既に亡く、いきなり女将さんになつてしましました。商売のことは何も分からず、一から懸命に覚えているうちに、戦争が激しくなり、小豆も砂糖も手に入らなくなつて、休業に追い込まれてしまいました。主人は軍需工場の経理として徴用され、私は生まれたばかりの息子を抱えて四苦八苦。それでも、休業中とはいえ、必死になって暖簾を守りました」

赤ちゃんを育てているのに、戦時の食糧不足は深刻で、田畠を持つ実家から米や野菜を送つてもらつてなんとかのぎました。戦後しばらくして営業を再開。女将さんとして、ご主人の六代目当主と力を合わせてお店を盛り立ててきました。

「主人は20年ほど前に他界しました。それでも七代目を継いだ息子がしっかりとやってくれています。八代目になる孫も菓子作りと経営の修業中、九代目になつてくれるはずの曾孫にも恵まれて、幸せに隠居暮らしをしています」

戦前、戦中、戦後と、さまざまな荒波にもまれてきた吉村さんは、「老舗を守り抜くのにいちばん大切なことは常に心を前向きに、毎日をきちんと暮らすこと。そんな私の基礎を作ってくれたのは、間違いなく樟蔭で過ごした日々です。厳しさと優しさを合わせ持ち、心から生徒を愛し指導してくれた先生方に、深く感謝しています」と言います。